

# 日本音楽芸術 マネジメント学会

会報

Nov. 2018

# 21

## 日本の オーケストラは 何を 目指すべきか



日本音楽芸術マネジメント学会  
理事

### 金山 茂人

Shigeto Kanayama

公益社団法人日本演奏連盟 専務理事  
公益社団法人日本オーケストラ連盟 副理事長  
公益財団法人東京交響楽団 最高顧問・評議委員長

この度 JaSMAM の事務局より日本における音楽界の問題点について会報の巻頭言を書くよう要請があった。いつもそうだが日本のオーケストラについて何か書こうとするとあまりに課題が多過ぎて戸惑ってしまう。

公益社団法人日本オーケストラ連盟は1990年の設立以来、四半世紀を超える年月が経っている。次から次へと問題が噴出して事務局を中心に関係者の苦労は並大抵ではない。この連盟には全国の主だったプロオーケストラが加盟しており現在正会員、準会員合わせて36団体に及ぶ。年間の予算規模を見ても最高がN響の約31億円ですば抜けている。例えば在京の自主オーケストラで11億円から18億円くらい、地方オーケストラは大きいところで10億円前後、中には1億円にも満たないというものもあり様々だ。

少し前になるがロサンゼルス・フィルハーモニックが来日の折、そこのプレジデントからアメリカのオーケストラ事情というテーマでお話を聞く機会があった。デボラ・ボーダーさんという女性で、何でも10年前にニューヨーク・フィルから引き抜かれて来たという。話は何もかも驚きの連続だった。ロス・フィルを21世紀中に世界屈指のオーケストラにするには先ず専用のホールと予算規模を倍額にすること

の大切さを説き、数年後見事に実現してしまったという女傑だった。結局専用のホールも造り、当時4,000万ドルだった（日本のオーケストラにとってこれでも羨ましいが）予算を9,500万ドル、他に基金1億7,000万ドルを集め、スタッフも140人（全員有給）、という、とてつもない大オーケストラに成長させた。我が国を代表するN響の予算と比較してもあまりの違いに唾然とさせられる。

ヨーロッパに目を向けてみよう。アメリカとは税法も違い国の成り立ちも規模も違うので一概に比較は出来ないが、企業等の寄付によって芸術文化が支えられているアメリカに対してヨーロッパの場合、芸術団体は国あるいは市、街と、いうなれば国民の税金で支えられているといっても言い過ぎではない。元来クラシックというものは19世紀までは貴族の持ち物であり王様の意向によって支えられてきた。しかし1789年に勃発したフランス革命は、やがてはヨーロッパ全体に広がり産業革命へと発展し、民衆は目覚め、貴族社会が崩壊した。貴族の持ち物であった芸術文化は民衆から支持され、世間が次第に落ちついてくると、わが街にオーケストラをと、オペラ劇場をといった声が段々大きくなり、やがては民衆の意思で次々と設立されていった。これらは国民のコンセンサスを得てい

ることになるから自分が支払った税金が芸術のために使われても興味あるなしに拘らず文句はいわない。ヨーロッパやアメリカでは何か問題点があるとすぐに抗議行動を起こす国民というイメージがある我々にとってとても意外だ。

一方、日本の場合、クラシックが伝わってきたのはせいぜい150年くらい前ではないか。といってもそれも国民の意志というよりほんの一握りの音楽愛好家によるものではなかったのか。この違いは大きい。我々がいくら声を大にして「もっと芸術文化に予算を！」と喚いてみても所詮金を出す方にしてみれば、「オタクたち勝手に設立したのだからどうぞお好きに」ということになる。それが証拠に歴代総理大臣の施政方針演説を聞いても、芸術文化の大切さどころか、文化という言葉そのものが殆ど皆無だ。最近全ての分野にわたり世界の芸術家と肩を並べるまでの音楽家が出現し賞賛されている。しかし殆どの音楽団体の経済的中味はとても脆弱で貧相だ。今後芸術文化の将来はどうなるのか。

国の将来を本気で心配して経済と共に同じくらい芸術文化も大切ということを実際に取り組む人材、例えば坂本竜馬か、せめて（失礼！）ロス・フィルのデボラ・ボーダーさんみたいな人物が現れないものか……。

## 第10回夏の研究会

2018年7月21日(土)13時より、第10回夏の研究会が大阪音楽大学100周年記念館(K号館)パイプオルガン演奏室にて開催されました。今年、本学会は設立10周年を迎えましたが、今回の研究会は学会初の関西での開催です。初めに新理事長による挨拶、続いて《日本から世界へ～日本各地の音楽芸術創造と発信のあり方を考える》をテーマとするシンポジウムが行われ、文化庁地域文化創生本部および国内外で活躍中の専門家の方々をお迎えし、活発な議論が交わされました。

冒頭、今年度より新しく本学会理事長に就任した中村孝義 大阪音楽大学理事長・名誉教授からの挨拶では、研究会のテーマに関連し、自身も研鑽を積んだドイツでは個性豊かな文化が各地域で醸成され、それらが国全体の文化力を押し上げていることに触れつつ、今回のシンポジウムを通して日本各地での音楽芸術の創造や発信、およびその意義について考えたいとの趣旨説明がありました。

### 1. 基調講演

シンポジウムの初めに、基調講演として、文化庁より松坂浩史 地域文化創生本部事務局長をお招きし、「文化庁の京都移転と音楽芸術の創造と発信－文化庁は新・文化庁へ」と題する講演が行われました。まず、目前となった文化庁の京都全面移転の概略について、組織の改組、予算の現状、最近の事業における特徴等を中心に分かりやすくご説明いただきました。今後の事業展開では、こ



松坂氏による基調講演

れまでの文化庁が対象としていた領域に加え、それら既存領域の新展開と、新たな領域を対象としていくことの両面を想定しているとのこと。特に改正文化芸術基本法のもと、文化財・文化資源の活用と、「くらしの文化」「生活文化」の振興に取り組むとともに、文化の経済的価値をより拡大させていくことを重視しているとのことがありました。

そのうえで、文化芸術の創造と発信に向け、「多様な文化の受容者にどのように発信していくのか」「日本の文化をエキゾチックなものとして捉えるのか、



パネル・ディスカッションの様子

またはコスモポリタンなものとして捉えるのか」「文化の様々な発信に対して、それを受け止める力＝『文化の受容者の力』が弱まっているのではないか」という3つの観点から、文化の送り手と受け手の双方に対する課題提起をいただきました。

### 2. パネル・ディスカッション

続いて、上述の松坂氏に加え、演出家の井原広樹氏、作曲家の酒井健治氏、音楽評論家の船木篤也氏の4名のパネリストをお迎えし、モデレーターを中村理事長が務め、パネル・ディスカッションが行われました。

まず、井原氏からは、イタリアで研鑽後、関西(大阪)を拠点としつつ国内外の劇場で演出家として活躍されているなかで、関西以外での仕事と関西での仕事の両立が、ご自身のキャリアにとって重要と考えているとのことがありました。また、現場の例として、潤沢な予算をいかに使うかという発想が求められる韓国のオペラ制作や、アマチュアの情熱が支えている日本の市民オペラについても紹介があり、様々なオペラ制作の

方法とそれら公演の意義が幅広いという現状をお話いただきました。

次に、酒井氏は、17年間にわたり欧州各国にて留学と作曲活動を行い、エリザベート王妃国際音楽コンクールでグランプリを獲得など数々の賞を受賞後、今年(2018年)から拠点を京都に移されました。その際、

諸外国と異なり、日本で作曲家という職業が成立しうるのかという点で、ご自身の迷いや環境の違いに驚きつつも、新しい目標に向かって挑戦しているとのことがありました。

続いて船木氏は、音楽評論家としての見地から、文化の東京一極集中という現状に対し、一方で演奏水準や意欲的な活動状況を見ると、もはや中央と地方の差という尺度で語ることはできないと考えているとのこと。地域ならではのオペラ劇場も各地に育っており、それらの活動が東京を刺激することもありうるとのことでした。

各パネリストからのお話を踏まえて、文化芸術を受容する側のリテラシーの向上をめぐる話題を中心に、アーティスト、劇場、文化庁がどのように取り組んでいくべきか鋭い意見交換が行われました。また多彩なパネリストの意見から、文化芸術活動への公的支援の考え方には、日本と諸外国、あるいは行政とアーティストといった各々の立場の違いがあることが窺われ、参加者にも大変示唆に富む議論となりました。

議論の熱が冷めやらぬ中、17時30分より大阪音楽大学内学生サロン「ばうぜ」2階にて行われた懇親会では、(公社)関西二期会事務局長の堀田栄作氏が司会を務め、学会初の関西での研究会開催を祝し、中村理事長はじめ各理事らが挨拶しました。参加者の和やかな会話のなかに、学会の今後への期待も加わり、充実したひとときとなりました。



交流の輪が広がった懇親会

# SYMPOSIUM

## シンポジウム 1

### 「音楽批評の今日的役割」

12月16日(日) 13:30～ [C511 教室]

このところ情報発信のツールとして、従来の活字メディアよりもネットが格段に重要性を増すようになった。専門家、一般愛好家を問わず、誰もが自由に情報を発信し、いわば情報が氾濫する高度情報化社会になった今日、果たして、主として活字メディアを媒体に展開される専門評論家などによる音楽批評というものは、現在の音楽文化に対してどのような役割を果たすことができているのだろうか。

かつては、音楽を提供する側である演奏家やホール、エージェント、それを事前報道したり事後論評に対して場を提供する新聞、雑誌などのメディア、専門家としての経験と研究に裏付けられた論評を大局的な見地から責任の所在を明確にして展開する音楽評論家、それにその論評などを楽しみながら自らの音楽観や音楽に対する愛好を深める一般愛好家が、適度に距離を置きながら、しかもそれぞれがそれぞれの存在価値を認め、分をわきまえながらバランスよく存在していた。その結果それぞれが充実感を感じる内実豊かな音楽文化というものが醸成されていたように思われる。

しかし今日、このバランスは大きく崩れ、音楽を提供する側の中には、それを公益性の高い文化事業と捉えるのではなく、単純な商行為と割り切り、事後批評など宣伝の役にも立たないし、評論家に聴いてもらっても何の意味もないと言い切るところも出てきている。また新聞などのメディアでも、総じて音楽評論に対する場を大きく縮減する方向にある。それに愛好家の中には、責任の所在も明確にせず、偏った見方から言いたい放題に、場合によっては中傷と言わざるを得ないような発言をネットで繰り返す人もいる。

もちろん評論家も活字媒体だけでなくネットを通じて活動を展開することもできるし、発信のあり方が根本的变化を遂げているのに、活字メディアや評論家はその状況に対応し切れていないだけという見方もなくはないだろう。ただどうも今日あるような状態が、社会における音楽文化の健全な育成や発展に資しているようにはとても見えない。このように大きく様変わりした社会の中で、音楽批評(評論)と呼ばれるものは、果たしてどのような今日的役割を主張することができるのだろうか。もしかすればその存在意味はすでになくなっているのだろうか。

今回は、(株)AMATI 代表取締役の入山功一さん(エージェント)、読売新聞社文化部記者の松本良一さん、そしてネットを活用される音楽評論家の東条碩夫さん、主として新聞で批評活動を展開される平野昭さんの4人の方をお迎えし、それぞれのお立場から音楽批評(評論)の今日的意味や役割、さらにはその存在感を論じていただくと同時に、評論家の立場からはエージェントやメディアに対する注文、また逆にエージェントやメディアからは評論家に対する注文などを述べていただき、標記のテーマについての議論を展開したい。

登壇者	入山 功一 東条 碩夫 平野 昭 松本 良一	(株)AMATI 代表取締役 音楽評論家 音楽評論家 読売新聞文化部記者
モデレーター	中村 孝義	大阪音楽大学理事長・名誉教授、 JaSMAM 理事長 (敬称略)

## ラウンドテーブル「異文化と自文化の境界——〈文化〉再考」 12月15日(土) 18:00～ [A211 教室]

〈文化〉とはいったいなんだろうか。わたしたちは、自分と異なるもの(他者)と出会うと、それが「異文化」と呼ばれるものであることに気づく。そして「異文化とどう付き合うか」「異文化とはなにか」と考えさせられる。やがてそれを裏返して「なにをもって自文化とみなすことができるのか」へと思考が進む。さらに「文化を自他に分けることは可能か」「文化に境界線を引くことはできるのか」へ問題を転じ、「そもそも〈文化〉とはなんであるか」に議論は向かっていくことになる。

〈文化〉を対象とする研究や活動は多々あるが、〈文化〉という語の定義は一律ではない。その目的・方法によって異なり、さらには同じ領域の活動であっても人によって異なる位置づけがなされることも稀でない。〈文化〉を人間の営み一般と広く捉えるものもあれば、〈文化〉を社会と深く関連したものと位置づけるものもあり、〈文化〉に政治性・イデオロギー性を見出すものも

ある。われわれの日常生活と密接であるからこそ、〈文化〉は捉えにくいと言ってもよいかもしれない。

本ラウンドテーブルでは、〈文化〉に関する複数の領域の研究者や実務家により、各領域・各方法論における〈文化〉の定義を共有し、また〈文化〉がいかに問題となるか(ならないか)討論する。これにより、〈文化〉に関する議論の多面性を捉え直し、〈文化〉を再考する一助としたい(ただし、必ずしも結論——例えば、〈文化〉という語に統一的な定義を与えるというよう——を出そうというものではない)。音楽を中心とするマネジメントや政策などを対象領域とする当学会としては、いささか異質な企画に映るかもしれない。しかし〈文化〉は音楽やその他の芸術を包含するのだから、これを再考することは足元を見直すことでもある。それは文化政策やマネジメントの新たな議論を誘出するだろう。本企画がそのきっかけになれば幸いである。

# SYMPOSIUM

## シンポジウム 2

# 「文化芸術への助成制度を考える」

12月16日(日) 15:40～ [C511 教室]

2017年度に文化芸術基本法が改正、文化芸術推進基本計画が策定されるなどの動きを経て、2018年10月に新・文化庁が組織改編により誕生した。学会設立10周年を記念する本企画では、はじめに、坪田知広氏（文化庁参事官（芸術文化担当））をお招きして、文化庁の新たなかたちについて基調講演をしていただき、文化政策の今後の方向性を考える機会とする。

続いて、我が国の文化政策が、体制だけでなく、その助成等の仕組みも変化する可能性をにらみ、（独）日本芸術文化振興会により企画され、2017年から2018年にかけて実施された調査『イングランド及びスコットランドにおける文化芸術活動に関する助成システム等に関する実態調査』の報告を行う。この調査は、「イングランド及びスコットランドについて、文化政策及び文化関係予算の概要、文化政策を担当する組織の概要及び文化芸術活動への助成制度の具体的な内容に関する実態調査を行うことにより、振興会における助成システムの機能強化はもとより、文化芸術活動に対する助成システムの充実及び文化政策の企画・立案に資する」ことを目的としたものである。

日本におけるアーツカウンシル制度を運用する（独）日本芸術文化振興会には、文化庁の再編に伴い、複数の助成事業が移管されており、助成事業に係る体制の整備と共に、効果的な助成制度の設計と運用が必至となっている。このような助成現場の課題認識に対応するべく行われた今回の調査結果から、英国の中でもとくに、アーツカウンシル・イングランドにおける、審査やモニタリングの手法、芸術団体等の自律性確保のあり方、政府との関係などを中心にとりあげる。さらに、助成制度を運用する人材の存在や活動の主体性がクローズアップされており、これらの成果を示しながら、アーツカウンシル制度の本質に迫る機会としたい。報告は、現在、（独）日本芸術文化振興会で助成事業に携わる矢田文雄氏（（独）日本芸術文化振興会基金部長）と、同調査に携わった石田麻子氏（昭和音楽大学教授）からの、我が国の助成事業の現状をふまえたものとなる。

さらに、パネルディスカッションでは、大規模な助成先である劇場・音楽堂等の代表として竹内淳氏（ミュゼ川崎シンフォニーホール事業部長）、オーケストラの代表として西濱秀樹氏（（公社）山形交響楽協会専務理事、（公社）日本オーケストラ連盟専務理事）が加わり、芸術創造の現場からの意見を交え、文化芸術の未来につなげる助成制度を展望する。

本企画により、学術的な立場を担保しつつ我が国の文化政策に対して提言し、文化芸術創造の現場との適切な接点を維持しながら、音楽芸術をはじめとする文化芸術のマネジメントにかかる将来像を展望、発信し続ける本学会の姿勢を確かなものにする。

### 基調講演

坪田 知広 文化庁参事官（芸術文化担当）

### 報告「日本芸術文化振興会委託『イングランド及びスコットランドにおける文化芸術活動に関する助成システム等に関する実態調査』から」

矢田 文雄 （独）日本芸術文化振興会基金部長

石田 麻子 昭和音楽大学教授、JaSMAM 理事、（独）日本芸術文化振興会プログラムディレクター（調査研究）

### パネルディスカッション

パネリスト 竹内 淳 ミュゼ川崎シンフォニーホール事業部長

坪田 知広 （前出）

西濱 秀樹 （公社）山形交響楽協会専務理事、  
（公社）日本オーケストラ連盟専務理事

矢田 文雄 （前出）

モデレーター 石田 麻子 （前出）

（敬称略）

### 登壇者

朝倉 由希 文化庁地域文化創生本部研究官／文化政策・文化行政  
熊澤 弘 東京藝術大学大学美術館／博物館学、西洋美術史、「シュリンクする日本の美術館」  
酒井 健太郎 昭和音楽大学／歴史、アイデンティティ、ナショナリズム  
佐本 英規 東京福祉大学／文化人類学、音楽人類学、オセアニア研究  
武田 康孝 国際交流基金／国際文化交流・文化外交

中村 美帆 静岡文化芸術大学／文化政策（史）、文化と法、「文化権」  
福田 裕美 東京音楽大学／民俗芸能、地域伝統芸能  
松岡 昌和 立教大学アジア地域研究所／文化史、メディア史、ポスト・コロニアリズム、文化の盗用・篡奪 cultural appropriation  
八坂 千景 大分・iichiko 総合文化センター／アートマネジメント、文化産業  
（敬称略、\*は企画・コーディネーター、\*は非会員）

# 第11回冬の研究大会

日本音楽芸術マネジメント学会は2008（平成20）年4月1日に設立され、同年6月26日に開催した設立記念シンポジウム「今、劇場は変わるのか」を皮切りに、10年間にわたり研究会・研究大会の開催、学会誌『音楽芸術マネジメント』や会報の編集・発行、文化芸術政策に関する幅広い意見表明等をしてまいりました。満10周年を迎えた平成30年度は、それを記念して、初の関西での研究会の開催、学会誌での特集、会報の増ページなどの取り組みをおこないました。

10周年記念の掉尾となる第11回研究大会は、例年より盛りだくさんの企画で開催いたします。午前中に20の多彩な研究発表・現場レポート、午後には、本学会ならではの内容による2つのシンポジウム「音楽批評の今日的役割」と「文化芸術への助成制度を考える」を実施いたします。また、シンポジウムに先立って、文化庁の中岡司次長より、ご挨拶と今後の文化政策の方向性についてお話を賜ります。さらに、初めての取り組みとして、大会前日に前夜祭としてラウンドテーブル「異文化と自文化の境界——〈文化〉再考」を開催します。ぜひ奮ってご参加ください。

日程：2018年12月16日（日）

会場：昭和音楽大学 南校舎

## PROGRAM

9:00~	受付 南校舎1階			
	会場 A (A211 教室)	会場 B (A212 教室)	会場 C (A214 教室)	会場 D (A215 教室)
9:40 } 10:20	熊沢 彩子 研究報告 視覚障害のある演奏家の音楽活動をめぐる「理解」と「誤解」——筑波大学附属視覚特別支援学校音楽科における試みを通じて	谷本 裕 研究報告 「バーンスタインの遺志」を探る——北独シュレスヴィヒ・ホルシュタイン音楽祭	市川 恵・石川 眞佐江・今川 恭子・加藤 富美子・小佐川 心子・伊原 小百合 研究報告 地域と連携した音楽アウトリーチの可能性——のざわこども園における参加型オペラの取り組みから	佐藤 広隆・西田 敏子 研究報告 オーケストラにおける日本人作曲家の受容——その実態と戦略的実現に向けて
10:25 } 11:05	福田 裕美 研究報告 日本の民俗芸能公演のアートマネジメント論の構築に向けた一考察	関 鎮京・石田 麻子 研究報告 地域との関係構築からみたオペラハウスのマネジメント——韓国・テグオペラハウスを事例に	梶田 美香・林 健次郎 研究報告 文化芸術の普及啓発に求められるアーティスト及びコーディネーターの育成について——愛知県芸術劇場の取り組みを事例に	松村 洋一郎 研究報告 2000年以降の各種辞典における西洋クラシック音楽の作曲家人名情報——記述量の調査と分析
11:10 } 11:40	森岡 めぐみ 現場レポート 音楽学者とコンサートホールの協働の27年	長嶺 久美子・小林 朋子 現場レポート 北海道における学校備品楽器再活用事業の現状と課題	鈴木 利奈 現場レポート 同志社大学 プロジェクト科目「クラシック音楽のコンサートを創ろう！」実施報告	中原 朋哉 現場レポート 地方における文化プログラムの現状
11:45 } 12:15	平井 満 現場レポート 地域民間主催者の活動——葉山室内楽鑑賞会の歩みと現状を中心に	佐久間 恭子 現場レポート リトアニア“Dainų šventė 2018（歌と踊りの祭典）”現場レポート	（一社）全日本ピアノ指導者協会（実方 康介）現場レポート 「公開録音コンサート」の成果と課題	熊澤 弘 現場レポート 限界を迎えた日本における博物館・学芸員制度
12:20 } 13:00	中川 俊宏 研究報告 舞台芸術創造活動活性化事業の制度上の問題点について	中原 朋哉 研究報告 日本のオーケストラに関する公的支援制度の研究——鑑賞者に対する直接支援の可能性	船越 理恵・市川 恵・萩原 史織 研究報告 地域における児童合唱団の役割——異年齢交流に着目して	増田 久未 研究報告 日本におけるガムランの楽器を所蔵する施設とその活動の現状

C511 教室（総合司会：中川 俊宏）

13:15 }	来賓挨拶	中岡 司	文化庁次長
13:30 }	シンポジウム1「音楽批評の今日的役割」		
15:40 }	シンポジウム2「文化芸術への助成制度を考える」		
18:50 }	懇親会 リストランテ・イル・カンピエッロ（昭和音楽大学南校舎敷地内）		

※プログラムは変更になることがあります。  
最新の情報を学会ウェブサイトでご確認ください。

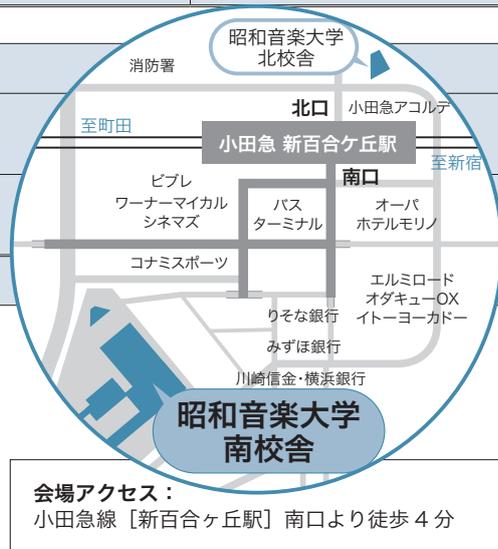
### 事前申し込みのお願い

- 資料や懇親会の準備の都合上、事前申し込みにご協力ください。
- お申し込みは学会ウェブサイト（<http://jasmam.org/>）に設置した申込フォームより受け付けます。

申込締切：12月4日（火）[必着]

参加費（当日、受付にてお支払いください）

	正会員・賛助会員	非会員（学生以外）	学生（会員・非会員）
12/15 前夜祭 参加費		500円	
12/16 研究大会 参加費	2,000円	3,000円	1,000円
12/16 懇親会 参加費	4,000円	4,000円	3,000円
12/16 弁当・茶		1,000円 ※要事前申込	



## 駅伝コラム ..... 第3回 すみだトリフォニーホール

今年、墨田区と新日本フィルハーモニー交響楽団はフランチャイズ 30 周年を迎えました。

フランチャイズの覚書には「芸術文化の限りない進展に寄与し、併せて、その成果に限りなく尊敬と愛情を抱く墨田区民による音楽都市の実現をめざして、共にもてる能力と情熱のすべてを傾けて協力し合うことを約束する。」と書かれています。1997 年すみだトリフォニーホールが東京東部地区を代表するコンサートホールとして開館、以来新日本フィルは定期演奏会や特別演奏会を行うほか、墨田区の学校体育館や小中学校の音楽授業、各種施設を訪問など、地域に根差した演奏活動も精力的に行っています。

「すみだの人たちの文化的な誇りになりたい。」と新日本フィル音楽監督・上岡敏之さんは言います。私たちの夢は、27 万人の墨田区民全員がすみだトリフォニーホールで新日本フィルを聴くことです。次のフランチャイズ 40 周年に向けて、すみだトリフォニーホールと新日本フィルは“もてる能力と情熱のすべてを傾けて協力し合い”、墨田区の人々にとって身近なホールとオーケストラでありたいと思っています。  
(すみだトリフォニーホール 上野喜浩)

### 学会誌第 10 号の刊行について

本年は学会創立 10 周年にあたり、学会誌『音楽芸術マネジメント』も記念すべき第 10 号の刊行となります。そこで特集「これまで・これから」と題し、本学会や音楽芸術を取り巻く状況の「これまで・これから」を振り返っていただく 10 の寄稿に加え、研究会・研究大会開催記録、学会誌・会報収載内容の 10 年分のデータ集を掲載いたします。第 11 回研究大会の開催に合わせて刊行の予定となっておりますので、どうぞご期待ください。

### 会費納入のお願い

当学会は皆様からお納めいただいた年会費により運営されております。年会費の納入状況等ご不明のことなどがございましたらお気軽に事務局にお問い合わせください。  
※会費の滞納が 3 年以上継続すると、会員資格を喪失しますのでご注意ください。

### 年会費

正会員（年額） 個人 8,000 円（学生 4,000 円）／団体 1 口 50,000 円（口数任意）  
賛助会員（年額） 個人 1 口 10,000 円（口数任意）／団体 1 口 50,000 円（口数任意）

### 振込先

【ゆうちょ銀行】 口座記号 00210-1 口座番号 71490 加入者名 日本音楽芸術マネジメント学会  
※郵便局に備え付けの払込取扱票をご利用の場合は、通信欄に「お名前」「ご連絡先」「何年度分会費か」をご記入下さい。  
【りそな銀行】 新百合ヶ丘支店 口座番号 普通 1363560  
口座名義 ニホンオンガクゲイジユツマネジメントガツカイ（日本音楽芸術マネジメント学会）

### 現在の会員数

(2018 年 11 月 15 日現在)

正会員：個人 206 名（うち学生 20 名）、団体 8 団体（（公財）青山音楽財団、昭和音楽大学〔（学）東成学園〕、（一社）全日本ピアノ指導者協会、名古屋芸術大学、（公社）日本オーケストラ連盟、（公財）日本オペラ振興会、（株）プレルーディオ、武蔵野音楽大学／五十音順）  
賛助会員：個人 1 名

### 日本音楽芸術マネジメント学会 運営体制

会長 川村 恒明 顧問 福井 直敬 ■

#### 理事長

中村 孝義 (学) 大阪音楽大学 理事長・名誉教授

#### 副理事長

中川 俊宏 武蔵野音楽大学 教授・音楽総合学科長  
渡辺 健二 東京芸術大学 教授

#### 理事

石田 麻子 昭和音楽大学 教授・学長補佐  
上田 順 武蔵野音楽大学 講師  
金山 茂人 (公社) 日本演奏連盟 専務理事  
岸田 生郎 昭和音楽大学 教授  
久保田 慶一 国立音楽大学 教授・副学長  
酒井 健太郎 昭和音楽大学 准教授  
澤 恵理子 (公社) 日本演奏連盟 常任理事・事務局長  
下八川 共祐 (学) 東成学園・昭和音楽大学 理事長  
竹本 義明 名古屋芸術大学 学長  
永井 健一 神奈川県立音楽堂 館長（（公財）神奈川芸術文化財団）  
中山 欽吾 (公財) 東京二期会 評議員会議長  
菲澤 弘志 昭和音楽大学 客員教授、（公財）東京二期会 理事長

#### 丹羽 徹

(一社) 日本クラシック音楽事業協会 常任理事・事務局長

#### 松本 辰明

(公社) 全国公立文化施設協会 専務理事

#### 関 鎮京

北海道教育大学岩見沢校 准教授

#### 森岡 めぐみ

いずみホール企画部 次長

#### 山田 純

名古屋芸術大学芸術学部 教授

#### 米屋 尚子

(公社) 日本芸能実演家団体協議会実演芸術振興部 部長

#### 監事

#### 上村 英郷

武蔵野音楽大学 准教授

#### 諸角 憲治

元（財）野村国際文化財団（現（公財）野村財団）事務局長

#### 幹事

#### 熊澤 弘

東京藝術大学大学美術館 准教授

#### 角 美弥子

北海道教育大学岩見沢校 准教授

#### 仁科 岡彦

(公財) 日本オペラ振興会 事務局長

#### 福田 裕美

東京音楽大学 准教授

#### 堀田 栄作

(公社) 関西二期会 事務局長

#### 壬生 千恵子

エリザベト音楽大学 准教授

#### 宮崎 刀史紀

(公財) 京都市音楽芸術文化振興財団ロームシアター京都 管理課長

#### 吉原 潤

昭和音楽大学 専任講師

#### 委員会・事務局（\*は各長）

#### 編集委員会

赤木舞／朝倉由希／石田麻子／久保田慶一／熊澤弘／佐藤良子／角美弥子／竹内潔／中川俊宏／福田裕美／壬生千恵子／山田純\*

#### 通信・広報委員会

上田順／岸田生郎／澤恵理子／角美弥子／中川俊宏\*

#### 企画委員会

石田麻子\*／上田順／堀田栄作／壬生千恵子／関鎮京／森岡めぐみ

#### 事務局

酒井健太郎\*／袴田麻祐子／吉原潤

#### 10 周年記念プロジェクト

統括：中村孝義／統括補：石田麻子／中川俊宏／森岡めぐみ／山田純／幹事／事務局

※五十音順、2018 年 11 月 15 日現在

### お問い合わせ

### 日本音楽芸術マネジメント学会 事務局

〒215-0004 神奈川県川崎市麻生区万福寺 1-16-6 昭和音楽大学舞台芸術政策研究所内

TEL 044-953-9858 / FAX 044-953-6652 / E-Mail jimukyoku@jasmam.org / URL http://jasmam.org/

#### 編集・発行

発行日

レイアウト・組版

印刷・製本

日本音楽芸術マネジメント学会

2018年11月15日

岡留 洋文 (studiosatz)

(株) インフォテック

電子メールや郵便物等が戻ってくるケースが増えております。メールアドレス、ご住所等の変更がございましたら事務局までお知らせください。